

顕現

知っておきたいキリスト教のことは (68)

「顕現」とは、神さまが人間の前に現れることをいいます。旧約聖書の創世記で神さまは、アブラハムやヤコブ、イサクの前に現れました。さらに出エジプトではモーセ、あるいは預言者の召命など、イスラエル民族にとって重要な場面で顕現が描かれます。

しかし同時に、「神さまの顔を見ると死んでしまう」という考え方もあり、夢で神さまのみ吉げを聞いたり、天使が代わってメッセージを届けたりする場面も見られます。



そして新約の時代になり神さまは、イエス様を通してご自分を現わされます。さらに顕現という言葉は、異邦人に対するものとして使われます。マタイによる福音書 2 章に「占星術の学者たちが訪れる」という記事があります。これは東方から学者たちが星を頼りにイエス様を拝みに来るという日で、この日（1月6日）を聖公会では「顕現日」と呼んでいます。

多くの降誕劇では、イエス様が誕生すると羊飼いたちが来て、そのあとすぐに博士たちが贈り物を持ってやって来るように演じます。しかし教会暦では、イエス様の誕生と羊飼いの訪問はクリスマスですが、博士が来るのは1月6日です。そのためクリスマス飾りも、その日まで残すのです。

なおヨーロッパなどのカトリック教国では、顕現日にケーキに豆や小さな人形、貴金属などを入れて、食べた人がそれにあたらその日一日王様になれるという習慣があるそうです。

また、スペイン語圏、ポルトガル語圏、イタリアなどでは、クリスマスプレゼントは顕現日（1月6日）に渡すそうです。もし12月25日に準備し忘れたら、言い訳として使ってみてはいかがでしょうか。

次回は「原罪」です。お楽しみに。